

醫者共可成其意得旨、急度可申渡候。食傷など、申候て、むざと藥をあたへ横死の者多候間、醫者共可爲曲事候。諸病疝氣の方を兼令療治候様に、是又可申聞候。謹言。

五月二十日

肥前御判

葛巻隼人殿

一、五十川剛伯の詩範進獻

十二月朔。五十川剛伯詩範一部九冊撰述調進之。是舜水先生に所承置を以て連年編集、最初奥村因幡奉之に付、因幡より上之。六日藤田安勝を以て段々御説有之、御羽織並白銀十枚、剛伯へ被下之。

一、除日立春

除日。けふは立春なりけるまゝ。

けふに暮て行なる年に春立て名残もいづらたどらるゝ哉

一、癸酉元旦の歌

六年癸酉元朝。

あら玉の年とて霞む春雨に長閑なる世のけしきをぞしるかすむらん芳野の山のけしきまでさぞと白根の春の初空

動きなき山をためしに梓弓やちよをかけてかすむ春かなとしの内に霞初めつゝ明て今朝春の光は四方にみつらん立そむる霞の衣きのふけふかさねて四方に春やきぬらんあさあけの霞の衣たち初めて今日はつ春の色や添ふらん光なき里だに有るを梅が枝のほへる宿の今朝の春かせみゆきふる年さり行けばしら山も峯に霞のたつかとぞ見ゆ

若菜

かすみたつ山澤水の淡雪にたえくもゆる若菜をぞ摘む青柳の絲打なびく門の前にけふとてつなく駒いばゆなり

霞

峯の雪尾山の松も打けぶり今朝より春にたつかすみかな

鶯

朝日かけにほふ竹葉にうつりきてよもにや春をつくる鶯

梅

やぶしわかぬ春の光も知れけり我のみむかふ窓の梅が枝

柳

庭の面に花ともみえてちる雪を風のふくまゝあを柳の絲

月前梅

空かけてにほふ梅が香いく里の人のこゝろや春の夜の月

山霞

さく花のゆふべはあれど足曳の山はかすめる明ぼのゝ空

野澤始迎春

春にけさ雪やけぬらしたちそむる霞もふかき野邊の澤水

一、閑庭梅

十三日。閑庭梅といふことを。

吳竹も雪にとぢたる窓の前におとなくかをる梅のはつ花

一、室直清・山本基庸等の新聲

丹直清元日詩

鐘漏聲稀向曉天。高城淑氣五雲連。三朝膏雨散初澤。六出瑞花迎有年。上國衣冠鶴列裏。小臣拜舞獸樽前。儒家門外經過少。獨對書牕讀舊編。

昨日まで越のしら根のしらざりし霞にこもる春雨のそら

源 基庸

きのふたつ 春の霞や今朝の雨 竹田 忠張

今日よりやおもひ初を花の春 能 順

此花の立枝やきのふけふの春 木多 政長

花の色に雪もうつるやけふの春 同 政在

花にこそ待來しものを老の春 佐々木 定堅

空やまづ花の始の春の色 同 定保

先づにほふ梅や雪間の今朝の春 半田 正好

昨日こそたちもおぼめけ今日の春 前波 正晴

今朝ぞはやうつる心の花の春 青地 定理

おほけなく我も待えつ花の春 北村 元胡

一、春日八幡社頭に

十五日。

春日侍八幡社頭詠社頭祝和歌

春の色やかはらぬ松も石清水みづの鏡にみえてのどけき浅野と云川の橋わたり行くに、山の端もをかききほどにかすみわたり、流水に雪のちりかゝりけるを見て。

行水に霞ながれてちる花のおもかげうつす春のあはゆき浅野川といふことをたちこめて

花とみむかすめるあさの河水にしばしうかべよ春の淡雪一、堀宅左衛門を弔ふ

二十七日。吉田元茂娘舊冬堀宅左衛門へ嫁せしが、宅左衛